

10月6日(日)

## 第1回：“空間はどう表現されてきたか”

まず始めに、美術作品における空間の表現について歴史的に検証します。特に、ヨーロッパの遠近法空間と近代のセザンヌ以降の絵画空間、また西洋と東洋の空間表現の違いなどについてあらためて語るなかで、美術における空間とは何なのかについて考えてみます。

パネリスト：稲賀繁美／ジャン＝フランソワ・ブラン／小倉正史／清水敏男

### 「空間はどう表現されてきたか」

稲賀繁美

ヨーロッパのいわゆる遠近法による空間表象と近代のセザンヌ以降の絵画空間、また西洋と東洋の空間表現の差について総括的な報告を主催者から求められているが、これでは一般論の文化対照論となる恐れがあるので、具体的な歴史上の事例に即して異文化の交渉過程で発生した現象を取り上げ、話題を提供したい。

第1には江戸時代において西欧の透視画法がどのように日本で理解し咀嚼されたかを検証したい。西欧の幾何学的な技法に触れることで、かえってそこに日本の空間意識が発現した面がみられるからである。すなわち一見洋風の技法を忠実に理解しようとしていながら、日本の画家たちはそこに無意識のうちに従来の空間意識とその折衷や住み分け、さらには同居のための「借景」とでもいうべき方法を始動させている。これは外来の要素を受容する場合にこの列島の文化史を通じて何度となく反復されてきた解決法ではあるが、はたしてこうした解釈は透視画法という技術的合理性に裏付けられた原理と両立するものなのか。それともそこに誤解をとまなう逸脱を見いだして、それを徳川日本の空間意識の限界と認めるべきなのか。はたまた原理上で両立しないはずの要素を両立させる融通無碍な適応力に、透視画法そのものの自己限定を突破する契機を認めるべきなのか。

第2には、いわゆるセザンヌ以降の西欧絵画における「空間の破壊」とかつてピエール・フランカステルの呼んだ現象を第1の点との関連から解釈する作業があろう。遠近の対比、枠による空間の切り取りや切断、時間の要素の取り込みと完結性の放棄、「実現」の達成不能感と無軌道化、無限の包接への意欲と連鎖の要請、三次元空間の表象とは異なった二次元空間としての自律と、多元的空間の圧縮、魔術的な錬金術の舞台としての絵画空間への夢と光学的、心理学的な実験。もはや外界の平面上への投射としての映像ではなくなった絵画空間はいかなる可能性に開かれていったのか。

第3に、こうした可能性への解放とは裏腹な自己確認の作業があるだろう。絵画であれば、何らかの対象を表象する画面としての平面であることをやめ、色彩と線の構成によって何かをみずから表現する装置となった絵画は、いつしかその純粹志向の純潔主義ゆえに貧血状態に陥った。こうして純粹志向が放棄されるや、絵画平面は絵画なるものがいかにすれば成立するか、どこを越えれば崩壊するかの実験を試みる自己言及の場へと変貌した。立体へと拡張することは定義からして拒絶し、写真や織物、工芸的技巧やミクスト・メディアとも時に戯れながら競合し影響を及ぼし合うという、素材上の、そして社会的なもろもろの関係のなかで自己を確認しつつ、映画やビデオといった媒体との差異には意識的に目配せし、支持体としての壁面とも反発したり融合しつつ相互に侵食されないではない依存関係のなかで虚構としての自律の可能性を模索しつつ、はたまた過去の絵画の歴史との、否定か肯定か、断絶か継承か、隠蔽か盗用か、忘却か永遠回帰かといった二者択一とは異なった別次元の対応を求められ、さらには画廊や美術館という空間で、観客や批評家なる存在の視線に提供され、商品として流通すべく画家によって準備される画布ないし板に塗られた絵の具という前提条件そのものにも疑問を呈しながら、かつての社会的栄誉からははるかに遠く離れた地点で、自らの危うい立の基盤そのものの起源と期限とを問い直し、問い詰める—それが前衛の季節が去ってからのこのかたの絵画の営みであったかもしれない。

第4には、これの裏返しとして、空間の臨界への意識が研ぎ澄まされる。例えば絵画作品とか立体作品といった物体をその外界から区別する仕組みとそこに前提とされる政治性、制度的保証、その臨界に発生する波立ちや摩擦への考察が要求されよう。芸術作品なる特権的な装置とそれが占有する社会空間を保証する制度そのものに批判の目を向けるとき、問われるのは美術の解体とか芸術の終焉とかといった宣言ではなく、社会空間の空白を狙い、またその狭間に亀裂を刻み、それをより所にして、作品を作品として成立させよう環境をみずから開いてゆくことだろう。それは社会批判という姿を取る場合もあれば、常識の皮膜を剥ぐ作業ともなり、ファロスの祝祭へと接近もすれば、あえて日常に同化する戦術的埋没を選ぶ場合もあるだろう。断層や褶曲といった地殻運動のなかで形成される結晶のような成長もあれば、植物性の伸展、動物的な跳躍も介在しよう。侵犯ではなく、むしろ矛盾し錯綜した規則の網の目に寄り添いながら、意表を衝く浸潤として現れる術...

稲賀繁美  
水戸芸術館現代美術センター  
1996年10月6日

1996.10.6